



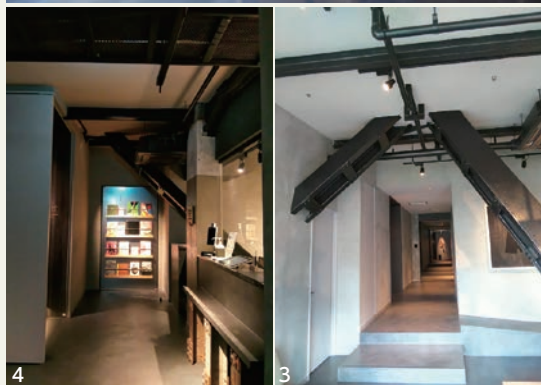
5.1933年に建てられた小学校の校舎を活かした「ザ・ホテル青龍 京都清水」。6.外観からは想像もつかない空間が広がる前橋の「白井屋ホテル」。7.1926年の建物を建築家・隈研吾氏がリノベーション監修して生まれ変わった「新風館」。

未完成感を残したリノベーションが魅力的

に移行したことでテレビ塔としての役割を終えた後、観光施設として残されながらも取り壊しの話も出ていた。それをホテルにしたいと提案したのが、ザタワーホテルナゴヤの代表取締役社長の藤巻満さんだった。

2016年にエッフェル塔で実施した、4組限定で宿泊できる企画にヒントを得たという。また、インバウンド需要が急増していたこともあり、藤巻さんは名古屋の魅力の世界に発信するとともに、東海3県の地元の人々にも愛されるホテルづくりを目指した。

最大の特徴は「テレビ塔に泊まっている」ことを宿泊客が意識



1.アーチが印象的な1階テラスのホットドッグカフェ「Farm&」。2.タワーのオブジェは地元出身の作家・森北伸氏の作品。眺望を楽しむ窓は斜めになっている。3.施設内に残るオブジェのような鉄骨。4.レセプションの横にある、一見するとディスプレイ棚が、実はレストランの入口。こうしたギミックがそこかしこに施されている。

できるよう、塔の鉄骨は客室であろうとロビーであろうと、元の位置のままむき出しで残したことだ。そのため、館内のさまざまな場所に鉄骨が突き抜けている。

また、地域の魅力発信として、インテリアには東海地方にゆかりのある作家のアートやクラフトを採用。部屋ごとに異なる作家の作品を楽しめるので、部屋を変えて連泊する宿泊客もいるという。

興味深いリノベーションが日本各地に出現している

少子化の影響で統廃合が進む小学校の校舎は、各地でオフィスや高齢者施設など多様な目的で再活用されている。なかでも五十嵐さんが注目しているのが、京都の元清水小学校をリノベーションした「ザ・ホテル青龍京都清水」だ。

昭和8（1933）年に建てられた鉄筋コンクリートの校舎を活かしながら、当時のデザインを踏襲してリノベーションしている設計も魅力的ですが、閉校になった後も建物を残してきた地元の

方々の思い入れを感じられるところがいいですね」

清水小学校の開校は1869年。当時の京都は、明治政府の学校制度制定に先駆けて、住民たちがお金を出し合って番組小学校という地域の学校を作ってきた。清水小学校もそのひとつで、その思いがあるからこそ「壊さない選択」をしてきたと五十嵐さんは推察する。

また、京都には大正時代に建てられた旧京都中央電話局の建物をリノベーションした複合施設「新風館」もある。建築デザイン監修に隈研吾氏を迎え、2020年6月にリニューアルオープンした。



五十嵐 太郎

いがらし・たろう 建築史、建築評論家／東北大学大学院教授。あいちトリエンナーレ2013芸術監督、第11回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館コミッショナー、「窓学展—窓から見える世界—」等を監修。第64回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。『リノベーションの現場』、『モダニズム崩壊後の建築—1968年以降の転回と思想—』ほか著書多数。

「京都の街並みとの調和を意識して新しく作られたルーパー部分など、元のモダニズム建築の建物の組み合わせも面白いですね。旧電話局からNTTのビルとして利用されていたのが2001年に商業施設の『新風館』として一度改築され、今回が二度目のリノベーションです」

商業施設からホテルなども含む複合施設へ生まれ変わっても、当初の建物を活かしている。京都の歴史的建築というと木造の古刹をイメージするが、大正から昭和初期に建てられた西洋建築のリノベーションが多いのも興味深い。

リノベーションされるのは、歴史的に価値を認められた建築物だけではない。元は普通のビルだからこそ大胆で自由な改造ができたことで五十嵐さんが注目しているのが、昨年末に新規開業した前橋市の「白井屋ホテル」だ。江戸時代から300年にわたり親しまれてきた旧宮内庁御用達「白井屋旅館」。多くの芸術家にも愛された老舗旅館だったが、1970

年代にホテル業に転換。しかし、町の衰退とともに2008年に廃業となり、取り壊しの危機にあった。地元出身の起業家を中心となって進めていた前橋市の活性化活動の一環として、白井屋ホテルを再生させることとなった。

「元のホテルのコンクリート構造をむき出しにして利用しながら、内部を巨大な吹き抜けにしたり、近くの河川を意識した土手のような外観の背面があるなど、ユニークなデザインになっています。しかし表から見ると打ち放しのコンクリートがいい感じの廃墟感を醸し出しています。ホテル内には世界的なアーティストや地元の芸術家の作品があふれ、アートのスポットとしての機能も果たしています」

日本各地で進むこれらのリノベーションについて五十嵐さんは「面白くなってきた」と語る。

「リノベーションの際は、あまり綺麗に仕上げすぎない方が魅力を感じます。どこかに未完成感を残すことで、未来とのつながりも感じるのではないだろうか」